

教育相談におけるスヌーズレンの活用

— 重度・重複障害のある子どもの主体性を尊重した環境づくり —

大崎 博史 石川 政孝

(教育相談部主任研究員) (神奈川県立武山養護学校教頭)

1. スヌーズレンについて¹⁾

スヌーズレン (snoezelen) とは、障害のある人とその支援者が共に活動するときの理念とその実践法を指す言葉である。²⁾ スヌーズレンという言葉は、オランダ語の「くんくんにおいをかぐ」という意味のスヌッフレンと「くつろぐ」、「うとうとする」という意味のドースレンという2つの言葉からできている。このように、スヌーズレンは、「探索」と「リラクゼーション」の両方の意味を兼ね備えている。スヌーズレンの理念は、1970年代にオランダのエデにあるハルテンベルグセンター（知的障害者の入所施設）の職員を試みからはじまっている。当時、ハルテンベルグセンターの職員が、いわゆる障害が重度であるといわれている人々に、その人たちの主体性を尊重したサービスを提供しているかどうかを確かめるためのさまざまな実践的な試みを実施し、その試みの中から、いわゆる障害が重度であるといわれている人々に対して、五感等の感覚刺激を媒介とした環境設定や用具等を工夫することが必要という考えに至ったことが、現在のスヌーズレンの理念につながっている。鈴木（2007）³⁾によると、スヌーズレンの目的は、「障害者自身が、自分自身の時間を、自分自身の選択で活動できる場で過ごすことにより、生活の質を高めることにある。」と述べている。私たちは障害のある人たちとかがかわるときに、かかわり手が一方的に意図したプログラムに基づいて、かかわることが多いのではないだろうか。鈴木はスヌーズレンの理念について、「支援者が一方的にプログラムを立てて、特定の効果を求めるたぐいの治療法や教育法とは一線を画する。」とも述べている。それでは、スヌーズレンの目指すことは何なのだろうか。

鈴木（1997）⁴⁾によると、スヌーズレンの理念として以下の二点をあげている。

- (1) 重い障害を持つ人々に視覚、聴覚、臭覚、触覚など各種の刺激を用意し、それを楽しめる環境を提供することで、障害を持つ人々が自分自身の選択で活動できるようにする。
- (2) 知的障害を持った人と共にする活動において、介護者は治療効果や発達促進を一方的に求めるのではなく、知的障害を持つ人の反応をありのままに受け入れ、楽

しむこと

である。

スヌーズレンの理念は、障害のある人（特にいわゆる重度・重複障害のある人）にとって楽しんで活動できる環境を提供し、その人が自分の時間を自己の選択にもとづいて活動し、かかわり手も、その人の活動をありのまま受け入れることを目指すことにある。

スヌーズレンの理念を実現するためには、このように多様な感覚に働きかける遊具・玩具等を配置した環境の中で、障害のある人がリラックスできたり、アクティブな空間を保障されることにより本人自身が自由に探索できるような環境を整えることが必要である。自由に探索できる環境を用意されることによって、いわゆる重度・重複障害のある人の自発的な動きや表現が促され、その人の好みや興味関心をはっきりと現れてくる可能性がある。そこから手がかりを得ることによって、もしかして今までかかわり手が理解することができなかった重度・重複障害のある人の内面や動きについて、その人を理解することの一助につながる可能性がある。

以上のことから、スヌーズレンの理念は、障害のある人の障害の種類や程度を問わず、さまざまな障害のある人が活用できる。さらに障害がある人だけでなく、幼児や成人、高齢者までも幅広い人にも活用できるものである。

2. 研究所におけるスヌーズレン導入の経緯

研究所の旧重複障害教育研究部では、平成12～13年度の2年間にわたり、特別教材教具の試作研究として「重度・重複障害児のための応答する環境の開発についての実際研究」^{5) 6)}を進めた。この研究では、いわゆる重度・重複障害のある子どもが活動し、生活する場に「応答する環境」を容易に設定できるような携帯性を考慮したユニットとして構成できることを重視し、いわゆる障害の重い子どもたちのニーズに対応した教材教具を試作した。また、子どもたちの遊びや学習、社会参加を支援する様々な教材・教具を改良し、試作を行った。さらに、重度・重複障害のある児童生徒が、周囲の人やものに働きかけることができるように、人の相互性やものの応答性のある「応答する環

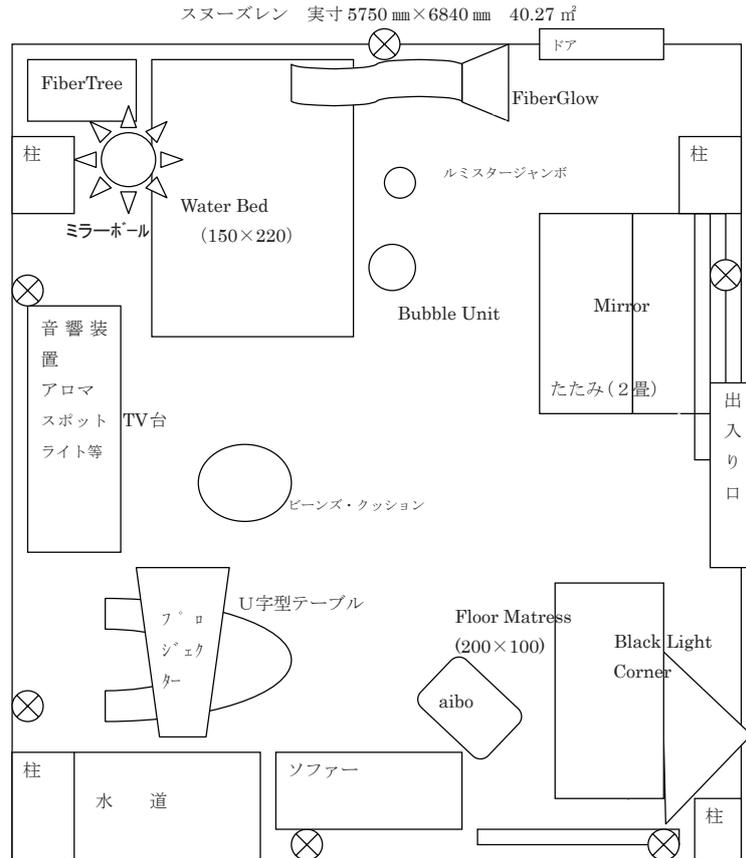


図1 スヌーズレン・ルームのレイアウト(案)

境」を設定することが重要であり、子どもが十分に周囲の環境を探索できるように援助し、子ども自身が周囲にある玩具や家電製品などを操作し、それを楽しめるように改造するなど実際に教育現場で工夫された具体例を示した。

また、平成14～15年度一般研究「肢体不自由を主とする重複障害児の環境との相互作用に関する実際研究」⁷⁾では、生活環境の中で身近な人やものとの相互の活発なかわり合いを促す実践研究を行った。この研究では、授業における学びの支援ということで、「教師が子どもを刺激して、子どもが反応するのを期待する教師主導での授業から、子どもはすべて多少とも知覚者であり、行動者であり、知覚する力があり (sentient)、自発的に動く (animate) ものであるという認識に基づいた子ども主導の授業に転換し、授業を子どもと教師と教材との出会いと対話の場とする中から指導の糸口を探る必要がある。」とし、「子どもは、日々の生活の中で子どもを取り巻く環境の中にある様々な情報に接しているが、どんなに障害が重度とみられても、子どもは周囲にある様々な情報の中から自分にとって意味のある情報を取捨選択している (しようとしている)。授業は、環境の中にすでに存在しているその子どもにとって意味のある情報から出発しなければならない。それを見い

だすためには、教師が子どもの情報の入力と行動としての出力を保障する手立てを造りながら、子どもと向き合い対話することである。対話という双方向のコミュニケーションを図る中で、子どもは自分を受け止める存在として、教師に安心感をもち行動を起こす際の拠点となるとしている。」としている。

このような、研究成果を実際の教育場面にもいかしてもらうことを念頭に置き、平成15年度には特別施設設備により、本研究所教育相談センター施設内に「スヌーズレン・コーナー」を設置した。この頃、本研究所では耐震工事を実施していたため、母子宿泊棟 (現生活支援研究棟) に教育相談センターの機能が全て移転したが、そこの待合室を利用してミラーボールやプロジェクター、ルミスタージャンボ及びステレオセット等を設置し、教育相談で来所した人が利用できるようにした。ただ、この「スヌーズレン・コーナー」は、あくまでも教育相談待合室の一角を利用したコーナーであり、防音設備等がなく、利用するには他の教育相談との兼ね合いも考慮しなければならず、その活用にあたってはさまざまな課題もあった。

平成16年度は、耐震工事も終了し、教育相談センターの相談施設が、研究管理棟に再び移転することになった。そ

の際、今までの「スヌーズレン・コーナー」であげられた課題を考慮し、スヌーズレンを利用できる部屋を確保し「スヌーズレン・ルーム」を設置した。部屋を設置するにあたって、図1のようなレイアウトを作成した。このレイアウトは、石川が平成14年にスウェーデンのモッカシーネントレーニングスクール等を見学した際に得た知見等を参考に作成された。この時点から、本格的に本研究所の教育相談におけるスヌーズレンを活用することができるようになり、教育相談センター施設が、名称変更により教育相談部施設になっている現在に至っている。



写真1

3. 研究所における「スヌーズレン・ルーム」の設備

研究所の「スヌーズレン・ルーム」には、以下のような設備が設置されている。

① ウォーターベッド（ミュージックバイブレーション付き）（写真1）

ベッドマットの中には水が入っており、ゆったりと楽な姿勢がとれるようになっている。また、ベッドにオーディオから流れる音と振動が付加されるようになっており、ベッドに横になるだけで音と振動が体感できるようになっている。

② アロマ・ストリーム（写真2）

よい香りを発生させる装置である。香りをかぐことにより、リラックスした気分になることができる。

③ バブルユニット（写真3）

筒のなかには液体が入っており、その液体の中を泡のように気泡が舞い上がる。舞い上がるときにはかすかに筒が振動する。また、気泡は筒内の照明によって様々な色彩に変化する。

④ ルミスタージャンボ（写真4）

筒のなかには液体と金属片が入っており、スイッチを入れることでその金属片が対流しながら筒の中を動く。キラキラ輝きながら金属片が筒の中を舞う。「まるで、星がキラキラ舞うようである。」との感想もある。

⑤ サイド・グロー（写真5）

光ファイバーを透明なチューブで覆った物の束で、光ファイバーがさまざまな色彩に変化する。

⑥ ファイバー・ツリー（写真6）

球形の本体から出た枝が、クリスマスツリーのライトのように様々な色彩に変化する。

⑦ ブラックライトコーナー（写真7）

ブラックライトを使用することによって、暗がりでも蛍光色の物体が立体的に浮き出してみえるようになり、不思議な空間を醸し出す。

⑧ スポットライト（写真8）とミラーボール（写真9）



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

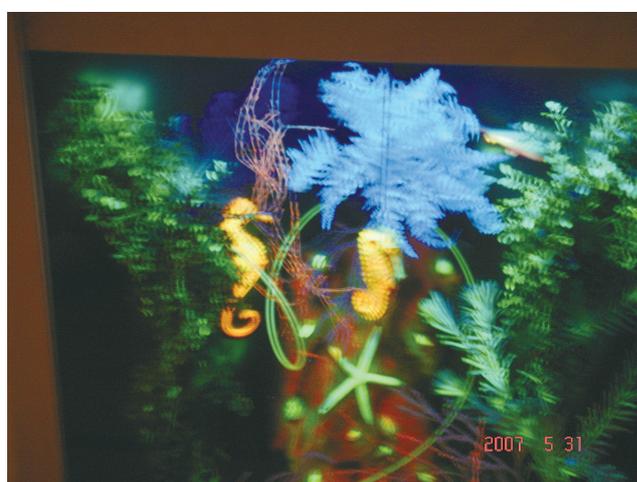


写真7



写真8



写真9



写真10

スポットライトは、色を変化させながらミラーボールに光をあて、ミラーボールはスポットライトの光を反射して様々な模様を壁に映すものである。

⑨ ソーラープロジェクターと特殊効果円盤カセット（写真10）

壁に特殊効果円盤カセットの効果により、さまざまな模様を映し出すものである。特殊効果円盤カセットには色のついた液体が入っており、その円盤が回転することによって不思議な形を投影することが可能である。

⑩ 変形鏡（写真11）

鏡に映ると実物とは少し変形した形で映し出される鏡である。

4. スヌーズレン・ルームの活用の仕方

研究所にスヌーズレン・ルームが設置されて以来、いわゆる重度・重複障害のある子どもの教育相談でこの部屋を利用することが多くある。また、この部屋の見学を希望される方も多い。（写真12：スヌーズレン・ルームの様子）

私が教育相談を担当している子どもの場合、ある子どもは保護者の運転する車に長時間揺られて来所することが多い。体にも麻痺がある上、長時間車で揺られてくるとなると、体が緊張している様子も見られる。来所してすぐにさまざまな活動に入ることは非常に難しいことが多いが、スヌーズレン・ルームを活用することによって体の緊張が緩むことがよくあり、そこから次の活動へとつながることもある。

また、緊張が緩むだけではなく、その子がスヌーズレンを利用する中で、保護者の方や教育相談担当者も予想して



写真11



写真12

いなかった動き等もみせてくれることがある。例えば、いろいろな色に変化するサイドグローを不思議そうに触る子どもがいたり、体に巻き付けたりする子もいる。また、ウオーターベットから出る振動を感じているようにじっとしている子どもの様子を見ることがある。さらに、重度・重複障害のある子どもだけではなく、他の子どもでもバブルユニットで気泡が上がる様子を不思議そうに眺めたり、バブルユニットを抱え込み、そのボコボコする振動を感じている子どももいる。ルミスタージャンボのキラキラ舞う様子を、上下さまざまな方向から眺めている子どももいる。

これらはいくつかの例に過ぎないが、研究所のスヌーズレン・ルームを活用した際には、子ども一人ひとりが、各人の状況に応じてその環境を活用する様子が見られる。ここでは、子ども一人ひとりの興味関心や好み、趣向等が大きく影響している。

スヌーズレンは、最初にも述べたように、障害のある人（特にいわゆる重度・重複障害のある人）にとって楽しんで活動できる環境を提供し、その人が自分の時間を自己の

選択にもとづいて活動し、かかわり手も、その人の活動をありのまま受け入れることを目指している。スヌーズレンの利用を考えている人は、是非、このスヌーズレンの理念を決して忘れないでほしいと思う。

研究所のスヌーズレン・ルームを見学された多くの方から、「うちにもスヌーズレンを設置したい。でも、ウォーターベットやサイドグロー、バブルユニットは高価で手に入れることが予算的に厳しい。」「こんなこと絶対にうちの学校や施設ではできません。」という話を聞くことがある。見学される方の中には、まるでスヌーズレンは、これらの高価な設備を整えなければならないとの思いを抱かれる方もいる。しかし、スヌーズレンの基本になっている理念は、視覚、聴覚、臭覚、触覚などにはたらきかけるさまざまな各種の楽しめる環境を提供することにある。また、それらを選択し活用する主体は、その環境を利用する、利用者自身に任せられている。

ある特別支援学校では、研究所のスヌーズレン・ルーム以上の物品を揃えた部屋を新校舎建設の際に作っているが、そこのある職員の方がおっしゃるには、「あまりにも新しい設備が整いすぎているために、この設備の上手な利用法のみを考えるようになり、子ども一人ひとりに応じた環境の工夫と提供が職員の中になくなってきた。」とのことである。このことから、スヌーズレンの理念を思い出して欲しいと思う。

また、ある療育施設では、研究所のスヌーズレン・ルームを見学後に、その施設の一室を利用してスヌーズレンの部屋を作っている。その部屋の中には、研究所のスヌーズレン・ルームのような高価な物品が揃っているわけではないが、職員がその療育施設を利用している子どもたちのために、インターネットのオークションを活用したり、おもちゃ屋めぐり等を行い、さまざまな物品を揃えて子どもが活動できる環境を整えている。その部屋は、スヌーズレンの部屋と呼べるかどうかはわからないが、少なくともスヌーズレンの基本の理念には合致していると思うし、職員の子どもに対するとても温かい思いや願いが伝わってくる部屋でもある。

5. 重度・重複障害のある子どもの主体性を尊重した環境づくり

いわゆる重度・重複障害のある子どもと教育相談等でかわるときに、そこには行動観察だけでは表現できない、とても奥深いものがあることをいつも感じることもある。科学的な根拠がないと言われればそれまでだが、一人の人間としての付き合い、向き合うことの大切さをつくづく思う。

考えてみれば、私たちは、いわゆる重度・重複障害のある子どもたちと何らかの関係づくりを望んでいて、または、子どもの何らかの動きを引き出したくて、私たち側（かかわり手側）のさまざまな思いによって、子どもに直接働きかけを行うことが多々ある。このことは一つの重要な子どもへのアプローチの仕方であると思うが、子どもに直接的に働きかけるだけでなく、子どもが主体的に、自ら何かを活用できるような環境づくりをしながら、間接的に子どもに働きかけを行っていく方法もあるように思う。

また、私たち自身もその環境を自然に受け入れ、子どもと一緒にその環境を共有できるとより一層、子どものことを理解するための一助にもなる。

スヌーズレンは、決してモデルルームのような模範となるスヌーズレンの物品を揃えただけではいけないし、高価な設備を設置しただけでは、本当の意味での「スヌーズレン」とは言えない。子ども一人ひとりには、それぞれの思いがあり、趣向があり、今まで生きて生活してきた生育歴もある。私たちがそのことを少しでも理解し、子どもが主体的に環境を活用できるように工夫し、子どもがそこで見たこと、聞いたこと、言ったこと、感じたこと、動いたこと等を子どもと共有できる等、子どもの主体性を尊重することが含まれて、はじめて「スヌーズレン」という言葉のもつ本当の意味と重要性がわかるように思う。

<引用文献・参考文献>

- 1) 日本スヌーズレン協会ホームページ <http://www1.ocn.ne.jp/~snoezel/>
- 2) 山中裕子：「スヌーズレンとは」はげみ平成14年4・5月号, 35-42, 2000
- 3) 鈴木清子：「感覚刺激による心のケア スヌーズレン」月刊実践障害児教育4月号, 22-25, 2007
- 4) 鈴木清子：「重症心身障害者と共にくつろぎ、楽しむ活動 スヌーズレン その理念と実際」両親の集い, 493号, 10-14, 1997
- 5) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所：「重度・重複障害児のための『応答する環境』の開発についての実験的研究」, プロジェクト研究教材教具の試作研究報告書, 2002
- 6) 独立行政法人国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部：「重複障害のある子どものコミュニケーションと探索活動」重複障害教育研究部一般研究成果報告書, 2002
- 7) 石川政孝・大崎博史：「研究のまとめ」独立行政法人国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部一般研究報告書「肢体不自由を主とする重複障害児の環境との相互作用に関する実験的研究」118-121, 2004